

答志島調査報告

答志島における自然災害について

鶴貝好子

1. はじめに

歴史地理学では、濃尾平野に形成された輪中地域で起こる水害に関して安藤萬壽男氏らの研究がある。昭和51年(1976年)には歴史地理学紀要『災害の歴史地理』が出されている。歴史地理学では、火山の噴火に関しても、研究がさかんに行われている。一方、日本史の分野においても数多くの研究がある。伊藤和明氏は19世紀までに日本列島で起こった地震と噴火についての顕著な事例を歴史認識の視点から述べている。地震においては、地質学や地形学による研究はもとより、歴史学や地震工学も加えた幅広い研究が行われるようになった。寒川旭氏は地震考古学という分野から地震の研究を進めており、北原糸子氏は近世の有力な災害情報であった、かわら版など多様な資

料を用いて民俗的な視点から災害を研究されている。このように、自然災害に関して様々な分野から研究が進められている。

本稿では、7月におこなった三重県鳥羽市答志島での調査を報告する。平成14(2002年)年4月24日に答志島全域が東海地震にかかる地震防災対策強化地域に指定された。そして、1853年に起こった安政の東海地震から150年が経過している。四方を海で囲まれている答志島において、人々は自然災害についてどのような認識を持っているのだろうか。海に面しているため、特に津波に対しては多くの聞き取りをおこなった。それも含めて考察を加えていきたい。

2. 伊勢・志摩の地震・津波、台風、豪雨における災害史

発生年月日	災害種別	伊勢・志摩の主な被害
1498年(明応7.8.25)	地震津波	伊勢・志摩で約10,000人の溺死者を生じたといわれる。
1586年(天正13.11.29)	地震津波	7月中旬に大地震があり、翌年まで、大小地震が続いた。津波はなかった。
1662年(寛文2.5.1)	地震津波	近江を中心とする大地震。近畿地方全般に被害。
1707年(宝永4.10.4)	宝永の地震・津波	震源地は紀伊半島沖。伊勢湾の津波の最高15m。被害も大きかった。
1708年(宝永5.1.22)	地震津波	津波は、伊勢山田吹山町を襲う。津波の高さ1m以内。
1722年(享保7.8.14)	暴風雨	大風雨。
1808年(文化5.7.25)	暴風雨	船津村12軒破損。
1854年(嘉永7.11.4)	安政地震・津波	鳥羽、大湊での推定震度は6。津波の高さは、鳥羽で5~6m。志摩半島では、10~20mにのぼったとの記録あり。
1854年(嘉永7.11.5)	地震津波	
1870年(明治3.7.17)	暴風雨	志摩国大風雨洪波。
1870年(明治3.9.8)	暴風雨	志摩地方大風雨洪波。
1870年(明治3.9.18)	暴風雨	暴風雨高潮により県下大被害。
1875年(明治8.9.10)	大雨洪水	大雨洪水により船津村被害。
1880年(明治13.9.10)	暴風雨	加茂川大氾濫。
1887年(明治20.2)	高潮	鳥羽町に高潮。

発生年月日	災害種別	伊勢・志摩の主な被害
1889年（明治22.9.11）	台風	三重県を縦断。台風・高潮。鳥羽の街路の水深膝に及ぶ。
1896年（明治29.9.11）	暴風雨	県下全域に大きな被害を与えた。
1911年（明治44.8.4）	暴風雨	暴風雨（北東風）となり、加茂川の水量が増える。
1912年（明治45.9.23）	暴風雨	
1918年（大正7.9.24）	暴風雨	甲賀・波切・船越・和具など被害、死者10人。
1925年（大正14.9.11）	暴風雨	度会郡南部に台風上陸。
1934年（昭和9.9.21）	室戸台風	近畿地方に惨害をもたらした。
1936年（昭和11.10.2）	暴風雨	志摩各地に被害。
1941年（昭和16.9.24）	暴風雨	度会・志摩両群で被害。
1944年（昭和19.12.7）	東南海地震・津波	鳥羽港での海面上昇は42cm。波高は1～2m。
1946年（昭和21.12.21）	南海道大地震	鳥羽の津波の波高は1.2m。
1949年（昭和24.7.29）	ヘスター台風	全県下に風水害。
1953年（昭和28.9.23）	高潮	鳥羽に高潮。
1953年（昭和28.9.25）	13号台風	高潮をともない、海岸線はほとんど壊滅に陥った。
1954年（昭和29.6.23）	暴風雨	豪雨で志摩、紀南でも被害。
1954年（昭和29.9.17～18）	14号台風	志摩半島の南東の沖合を遠州灘に向けて去っていった。
1959年（昭和34.9.26）	伊勢湾台風	鳥羽市で26日9時前後がもっとも激しかった。
1960年（昭和35.5.24）	チリ地震・津波	津波による波高は答志で2.5mに達した。のりなどの養殖施設は壊滅的打撃を受けた。
1961年（昭和36.9.16）	第2室戸台風（18号台風）	県下全域に大被害。
1962年（昭和37.7.2）	集中豪雨	梅雨前線による集中豪雨。
1964年（昭和39.3.28）	アラスカ地震・津波	志摩半島湾内の津波は中部で1.2m。
1965年（昭和40.9.17）	台風24号	伊賀地方での被害が大きい。
1966年（昭和41.9.23～25）	台風24号	伊勢志摩地方の低地で浸水、山間部でがけくずれ等の被害をだした。
1967年（昭和42.8.21～23）	台風13号	鳥羽市では船舶の被害が大きかった。
1971年（昭和46.8.30～31）	台風23号	伊勢湾台風に匹敵する。河川堤防の決壊、崖くずれ等の被害が出た。
1972年（昭和47.12.23～24）	強風・大雨	伊勢市から鳥羽市にかけての沿岸で収穫前ののりや施設が被害を受けた。
1976年（昭和51.9.8～13）	台風17号	前線と台風による大雨。
1979年（昭和54.10.4～9）	異常潮位	太平洋沿いに異常潮位が見られた。伊勢湾沿岸では各満潮毎に高潮が押し寄せた。
1982年（昭和57.7.31～8.3）	台風10号	志摩地方では記録的な豪雨。
1982年（昭和57.9.11～12）	台風18号	大型の強い台風。
1988年（昭和63.7.13～15）	梅雨前線豪雨	志摩半島を中心に局地的な豪雨。加茂川の増水と鳥羽港の満潮が重なり、氾濫をおこし、被害が大きかった。

（『鳥羽市史 下巻、資料（1.気象と災害）』より作成）

災害史を見てみると、いろいろな被害が起きていることが分かる。地震に関しては、次に大きい地震がいつ起こるのかを計算して予知することも可能になってくる。この表から見ると、台風の

被害が多い。一年のうちでも、台風は何回もやってくる。地震や津波は頻繁には起こらないが、大きなものが起こった時の被害は計り知れない。災害史を見ることによって、今後の防災対策を考え

る上でも役に立つ。さらに、人々の災害への意識が高まることが言えるだろう。

3. 答志島の地形

答志島のほとんどが、山地である。島全体は平坦地が少なく、海岸線の多くは、急な岸壁に囲まれている。答志町と和具浦は、標高132 mの砥石山を背に集落が重なり、桃取町は標高167.2 mの宮谷峠を背にその谷間に集落が伸びている。答志島は内海本土近接型の離島に分類され、比較的穏やかな海域内にある。和具浦の築上岬から答志町の北側にかけては、太平洋の外海に接し、冬の季節風や強い波浪を直接受けることから、海岸線は、絶えず厳しい自然条件にさらされている。無人島の牛島や浮島が天然の防波堤となる桃取町の集落周辺や、菅島に面する南側では、波静かな鳥羽湾に接しているため、なめらかな海岸線を形成している。

4. 自然災害と人との関わり合い

現在では、科学技術上の数々の成果があげられている。しかし、今も昔も変わらないのは、地域社会の絆ではないだろうか。竹田厚氏は阪神淡路大震災の時に、地域社会の絆が行政の力の限界を補ってパニックを回避したという。日本では、地域社会の連帯感はずいぶん強い。しかし、現状では、その連帯感が薄くなってきている。一人一人の防災意識を高めるとともに、非常時こそ、地域社会がお互いに助け合って災害を乗り切らねばならない。阪神淡路大震災、新潟県中越地震でも、地域の人々が助け合って生活している場面を何度も目にした。答志島の旅館組合で、平成16年(2004年)に起こった福井県の集中豪雨の被災地に援助物資を送っている。離れていても、人と人との深い繋がりを感じた。それぞれお互いを助け合って生きていることを実感した。

5. 桃取と答志地区での聞き取り調査

〈答志地区での聞き取り〉

●地形について

・答志島は伊勢湾内にあるため、津波はめったにこない。

・津波は陸にぶつかったところで発生するため、答志島はちょうど津波の通り道となり、うまく波が通りすぎる。

●地震について

・安政の東海地震の際、答志島でも被害があり、12軒の家が壊れている。鳥羽藩は12俵の見舞いを贈っている。このとき、和具に津波が来たという。この当時は家が2件ほどしかなかったため、被害は少なかったが、今では家がたくさんできたので、今度、大地震がとて怖いのではないかと言われている。安政の東海地震(1853年)から150年目にあたるため、地震に対しては警戒している。耐震工事を行っている家、避難場所を誰もが認識しており、島内放送もすぐに流れ、駐在所のお巡りさんも一人暮らしの人を理解しているという。

・答志島は岩盤であるため、地震が起きてもひどくならない。

●津波に対する認識

・答志地区では、気づかないくらいの津波だったので、後で地元の人ではない人にチリ津波だった、という話を聞いたという。答志地区の方の話では、和具の静かな海がこのとき一番、津波がきた。(チリ津波の時)

●その他自然災害に対する認識

・台風は数多くくる。台風の被害が一番多い。
・大雨でも、海にどんどん流れるため、建物は浸水することはない。
・傾斜地(崖)が多いため、土砂災害の危険区域に指定され、ハザードマップが出されている。←聞き取りできなかった

●風について

・風の影響は強い。漁師は漁に出ている時は風と雲で判断をする。

●昔から伝わること

・突風は一気になる。雲と答志から見える島とで嵐を判断する。レーダーが今では発達しているが、自然の状況でも判断をしている。自然環境についての昔から伝わる話は多少あるようだがほとんど今では知っている人がいない。

・大漁祈願とか、交通安全、家内安全とかはあるが、風の神に祈ったりすることはどうやらないらしい。

●その他

・風が強いため、屋根の瓦が飛ばないように網を

かけている。(台風の時などに備えて)

〈桃取地域〉

●地形について

・静かな海である。

●津波についての認識

・桃取では、チリ津波の時、潮がいつも以上にひいたため、魚が干上がって浜にあがっていたので魚を取りに行き、その後、津波が押し寄せる前に、高い所へ非難したという。

●その他自然災害に対する認識

・台風は数多くくる。台風の被害が一番多い。

・大雨でも、海にどんどん流れるため、建物は浸水することはない。

・傾斜地(崖)が多いため、土砂災害の危険区域に指定され、ハザードマップが出されている。

←聞き取りできなかった

●昔から伝わること

・自然環境についての言い伝えはほとんど知られていない。風の神に祈ったりすることはない。

●その他

・瓦が飛ばないように、屋根には網がかけられている。

6. まとめ

地震、津波、噴火、水害などの自然災害は、人間の力では完全には防ぎきれないことである。現在では、自然災害のメカニズムは科学的に解明されるようになり、技術の進歩によって、災害を予知することさえ可能になりつつある。災害時の情報伝達も速やかに行われるようになった。

近年の日本においては、1995年に阪神淡路大震災、2004年には浅間山噴火、福井県での集中豪雨、新潟県中越地震などの大きな災害が起きている。災害研究も各分野で盛んに行われている。過去に起きた災害を研究することは、これから起こる災害にどのように対応していけば良いかを私たちに教えてくれるものである。

答志島では、今まで、自然災害による被害が少なかったことが分かった。地形的な理由によるものが影響されているのだろう。しかし、安政の東海地震から150年以上たち、島民のみなさんの災害に備える傾向が強いことが分かった。答志島に住む人々は、自分たちの島の自然的条件を理解し

ている。そのために、一人一人の防災意識が高いといえるだろう。避難場所を知っていたり、耐震工事を行ったりしている。隣同士の助け合いもできている感じを受けた。風について、南や北の風は怖いという話は、伝わっているが、現在ではレーダーなど、様々な機械も使われるようになり、自然条件についての伝承は、伝わっていない傾向が強い。今回の調査では、和具地区での聞き取りが十分にできなかったことが残念である。このところ、異常気象や地震活動が活発になっている。私たち一人一人の防災意識をしっかりと持つことが必要だと改めて感じた。

謝辞

快く聞き取り調査にご協力いただいた答志地区のみなさま、和具地区のみなさま、桃取町のみなさまに心より感謝申し上げます。

参考文献

- 鳥羽市編さん室『鳥羽市史 下巻』1991
三重県鳥羽市「鳥羽市離島振興計画(案)」
力武常次・竹田厚『日本の自然災害』1998、国会資料編纂会
安藤萬壽男『輪中—その展開と構造—』1975、古今書院
『歴史地理学紀要』18号、1976
伊藤和明『地震と噴火の日本史』2002、岩波書店
萩原尊禮『古地震—歴史資料と活断層からさぐる』1982、東京大学出版会。
寒川旭『揺れる大地—日本列島の地震史』1997、同朋舎出版
北原糸子『近世災害情報論』2003、塙書房

つるがい よしこ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻・地理環境学コース